

看護大学における市民向け健康情報サービスの場での市民ボランティアの活動意識

山岡栄里¹⁾ 菱沼典子²⁾ 石川道子²⁾ 山田雅子²⁾ 小口江美子²⁾ 吉田千文²⁾ 高橋恵子³⁾ 印東桂子³⁾ 内田千佳子²⁾
佐藤直子⁴⁾ 大久保菜穂子⁵⁾

1) 東京武蔵野病院 2) 聖路加看護大学 3) 聖路加看護大学大学院後期過程 4) 聖路加看護大学大学院前期
5) 日本伝統医療科学大学院大

【背景】都内A看護大学では、市民が主体的に健康を創り守る事を目的に、市民への健康相談・健康情報提供を行う健康情報サービススポットを開設している。同スポットは8月と年末年始を除く月曜から金曜の10時から16時、無料で開放している。看護職と司書がコーディネーターとして常駐し、医療専門職ボランティア(以下専門職ボランティア)の協力を得て運営してきた。2007年より専門職ボランティアと共に市民ボランティアが新たに活動に加わり協働している。市民ボランティアはA看護大学で2006年度より開催された市民健康支援ボランティア育成講座の修了生で、活動内容や方法は限定せず、専門職・市民ボランティアが同席する会議や、勉強会を設け市民ボランティアが自ら主体的に活動を見つけ、作り出していくことを大切にしている。現在の活動は、スポットを訪れた市民への受付案内、健康チェック(骨密度・体脂肪等計測)、地域への広報活動、スポットで開催するイベントの運営などで、市民ボランティアらしい暖かな雰囲気の中で専門職ボランティアとの橋渡しを行っている。

【目的】本研究の目的は、市民ボランティアが健康情報サービススポットの活動開始以前に抱いていたボランティア活動に対するイメージと実際の活動の違い、および専門職ボランティアと協働することで得られた事を明らかにし、今後の活動の方向性を検討することである。

【方法】市民ボランティア15名に対して自由記載のアンケート調査とアンケート回答に基づき詳しいインタビュー調査を行い、得られたデータを質問項目ごとに類似する内容をまとめ市民の考えを抽出した。

【倫理的配慮】市民ボランティア個々に文書で研究内容方法を説明の上、同意書に署名を得た。またA看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号08-045)。

【結果】

女性14名	男性1名
50代	5名
60代	9名
70代	1名



表2 活動開始以前のボランティア活動イメージと
実際活動の違い

◆具体的な活動内容が示されない戸惑い
・決まった制約がなく選択の自由があり無理がない範囲で活動できる
・自分で勉強しないとイケない場だった
・具体的な行動が示されず、することがなく失望と不安を感じた
◆運営方針・目的
・市民が企画から一緒にやっているわけではなく立ち入れない
・ボランティア育成講座からのつながりがわからない
◆自分自身の活動状況
・思ったほど参加できなかった

表3 専門職ボランティアとの関わりで得たこと

◆自分の健康相談が出来る存在
◆専門性の理解
・専門職の技をみてすごいと感じる
・考え方を知り勉強になる
◆関わりを通し健康へ関心の高まり
・自分の健康管理を始めた
◆専門職と協働する困難
・看護職も市民の立場で良いのではないか
・専門職のテリトリーを守る壁を感じる
◆専門職と協働のスタイル
・専門職として尊重している
・専門職の補助にあたっている
◆関わりなし

【考察】

- ◆ 市民ボランティアは、活動について、制約なく選択の自由があると感じる半面、戸惑いも感じていた。これは自ら主体的に活動を見つけ作り出すことを大切にしていることが影響したと考えられる。結果から、活動に参加した当初から主体的に活動を見つけることには難しさもあり、部分的には具体的な活動を示していくことも必要と考える。
- ◆ 市民ボランティアは、専門職ボランティアとの関わりを通し、健康への関心が高まり、実際に自分の健康管理を始めた。これは、市民ボランティア自身が健康をつくりだす行動へと変容していることがうかがえる。
- ◆ 市民ボランティアは、専門職ボランティアを専門家と捉えており、協働活動に戸惑いを覚えている傾向にあった。今後、市民が健康生活の主人公となるためには、この戸惑いを解消し、双方が協働者として活動する機会を重ねる事が必要と考える。

